



特
278
135

328

長
崎
史
料

編 英 時 山 永



始



三百年前の長崎地圖

本圖の原本の製作年月は不明なるも、寛永三年（西暦一六二六年）に已に高野平に移轉した洪泰寺（後の瑞雲寺なり）が尙ほ女風頭山麓に、同十年（一六三三年）に焼失した爲め絲割符會所と土地とを交換して外浦町なる今の縣廳所在地に移轉した長崎奉行所が尙ほ本博多町に在るから、遅くとも寛永三年以前の作と見るの外はない。

本圖中に寛永十一年（一六三四年）に興福寺の住持唐僧如定が架設した有名な眼鏡橋（長崎に於ける最初の石橋にして酒屋町と磨屋町との間に在るもの）と同年起工、同十三年落成の出島とが記入されてあるのは、他の多くの長崎地圖で見ると異なり、後年貼紙をして記入したものであると思はる。原本を一見すれば此疑問は直に解決がつくのであるけれども、原本は已に失はれて今は唯模本のみを存するを遺憾とする。

圖中の扇形の小島は有名な出島の和蘭屋敷である。出島の對岸なる今の長崎縣會議事院の邊にはそのかみ耶蘇會の長崎支那があつた所であるが、丁度その所在地と思はる所に三階建の一大家屋が記入されてあるのは注目すべき。又橋梁の大多數が支那式の廊橋であること、長崎で一番始に出來た外浦町、平戸町、大村町、島原町などが、今の町の如く通路の兩側に家が並んで居ないで、一町毎に支那の大家族の住宅の如く各々一廓を爲して自衛の方法が講じてあつたやうに見えてゐるのも面白い。本圖中市街地が彩色で明かに二分されてあることも後世の長崎地圖と異つてゐる點である。白地の所は文祿元年（一五九二年）に初めて長崎奉行が置かれた時已に出來て居た市街地であつて、秀吉の命によりて地租を免せられ、所謂朱印地となつた町々である。其の町数は當時二十三町であつたが後二十六町に分れた。慶長元年（一五九六年）の頃までは右の二十三町の外は田島や海であつたが、人口増加の結果慶長二年に至り先づ村木町、本組屋町、雲町、酒屋町などといふ新しい町が出来た。今の藥町の邊はその頃までも尙ほ海であつたが慶長五年（一六〇〇年）に至り大川筋を通し埋築して市街地となし、之を築町と稱した。その後も段々と市街地は擴張されたのであつたが、此等の新しい町々は皆朱印地以外の地であるから、之を外町と稱し、長崎代官に命じて地租を徴せしめ、前述の朱印地は之に對して内町と稱せられた。併し此の内外の差別は元祿十二年（一六九九年）に至つて廢せられ、爾後長崎市街は皆諸公役配分銀等一切平等の取扱を受くることになつた。



三百年前の長崎地圖

出島の繪圖

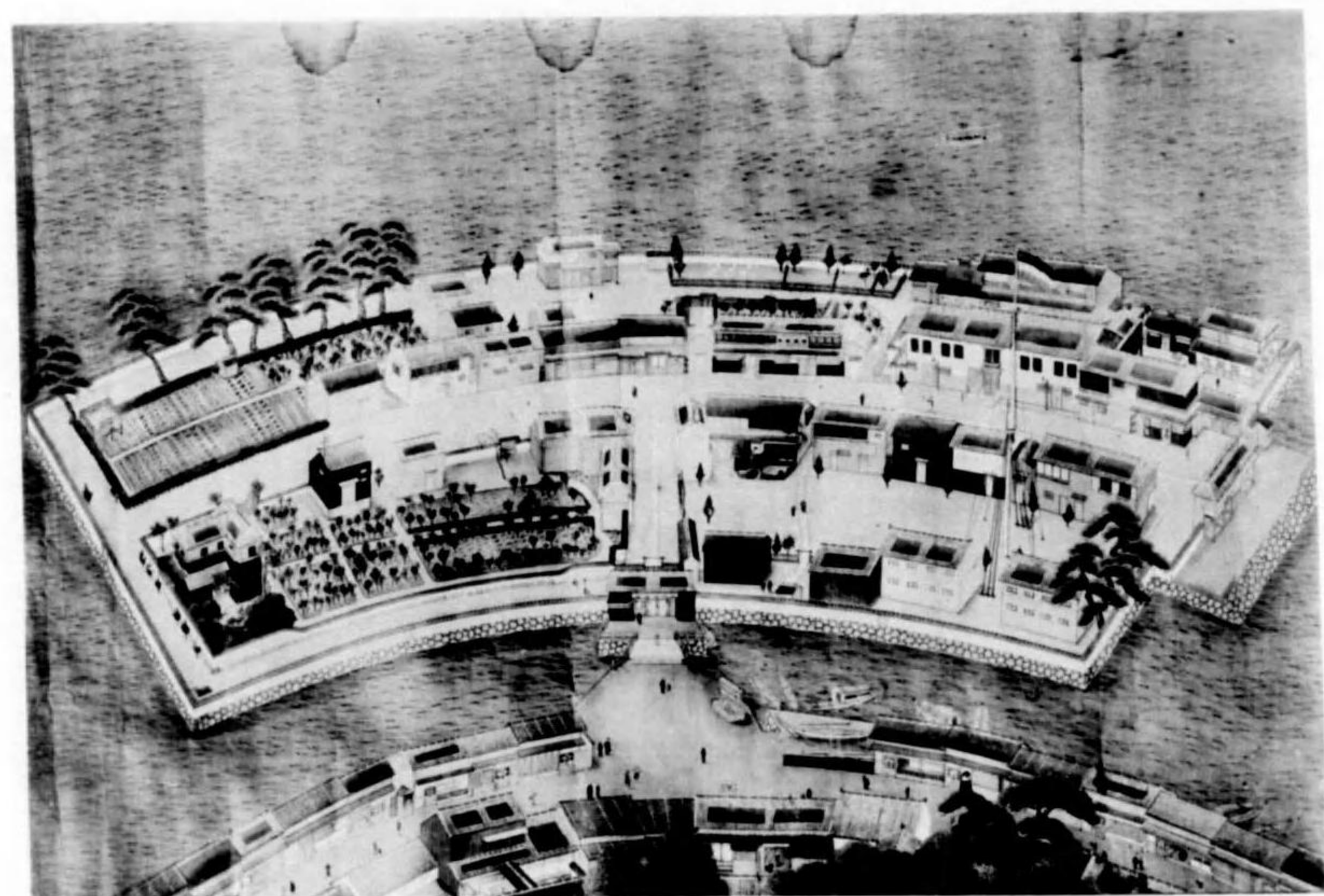
本圖の原本は和蘭政府の所蔵に係るもので、製作の年月は記入して無いけれども、建物などの具合から考ふれば寛政十年（一七九八年）の大火後の作なることは疑ふべくも無い。

出島は葡萄牙人を従来通り長崎市内に散留せしむるに於ては切支丹禁制の目的を徹底的に達成する見込のないことを知つた徳川幕府が幕府の一策として案出した葡萄牙商人の隔離所であつた。その建築工事は寛永十一年（一六三四年）に着手されたが、同十三年には落成したので、市内散留の葡萄牙人を同所に移居せしめ、長崎市民との交通を禁じたのみならず、彼等と日本婦人との間に生れた混血兒二百八十七人を悉く澳門に放逐し、且つ本邦人の海外渡航をも厳禁して、切支丹宗門宣傳の機会なからしめんことを期した。然るに翌寛永十四年（一六三七年）十月に至り天草と島原とに切支丹一揆が起り、約半歳の間天下を騒がしたので、幕府は益々切支丹宗門の恐るべきを知り、切支丹國との交際には全然之を斷絶せざるべからずとの議を決し、寛永十五年八月葡萄牙貿易禁止の命を發し、出島在留の同國商人に退去を命じた。是頃我國に渡來する歐洲商人は葡萄牙人の外に平戸に商館を有する和蘭人があつたが、彼等は新教徒なりしが爲めに、切支丹宗門の宣傳を行はざりしのみならず、却つて伴天連の入國防止に多大の援助を幕府に與へた程であつたから、幕府は和蘭人の通商は其後之を許容した。是より先寛永十二年幕府は唐船の入津を長崎一港に限りて許すことにしたので、寛永十五年以後我國の對外貿易は平戸の和蘭商館と長崎の唐船とに限られたのであつたが、寛永十八年（一六四一年）に至り幕府は命じて平戸の和蘭商館を出島に移轉せしめたので、爾來二百十八年の間長崎は我國に於ける唯一の開港場となり、其の間海外の文化は皆長崎を通して輸入されたのであつた。

出島は長崎江戸町の沖合に埋築せられた扇形の小島で、その面積は三千九百六十九坪餘、その沿岸線の長さは東西の兩側は各三十五間餘、江戸町に向へる側が九十六間餘、港口に向へる側が百十八間餘であつた。島の周圍は總て元丈な板敷で之を圍み、江戸町に向へる海岸の中央に正門を設け、正門前と江戸町との間に石橋を架して通路となし、西海岸には水門を設けて荷物の揚卸に便した。正門前の橋の袂には番小屋を設け、番人を置いて取締を嚴にし、島の周圍には數歩の海中に十三本の榜示木を立て、その内に船を近くること、出島橋の下を船の通航すること、は嚴に之を禁した。

島内には商館長以下の蘭人住宅を始めとして、娯樂室、乙名部屋、通詞部屋、倉庫其他附屬建物を建並べ、又花畑や、牛豚羊羶などの飼育場もあつた。

出島の使用料は寛永中幕府の命を奉じて之を埋築した二十五人の出島町人にその徴收權が與へられその金額は葡萄牙商館時代には毎年平均銀八十貫目であつたが、和蘭商館時代には年額銀五十五貫目となつた。



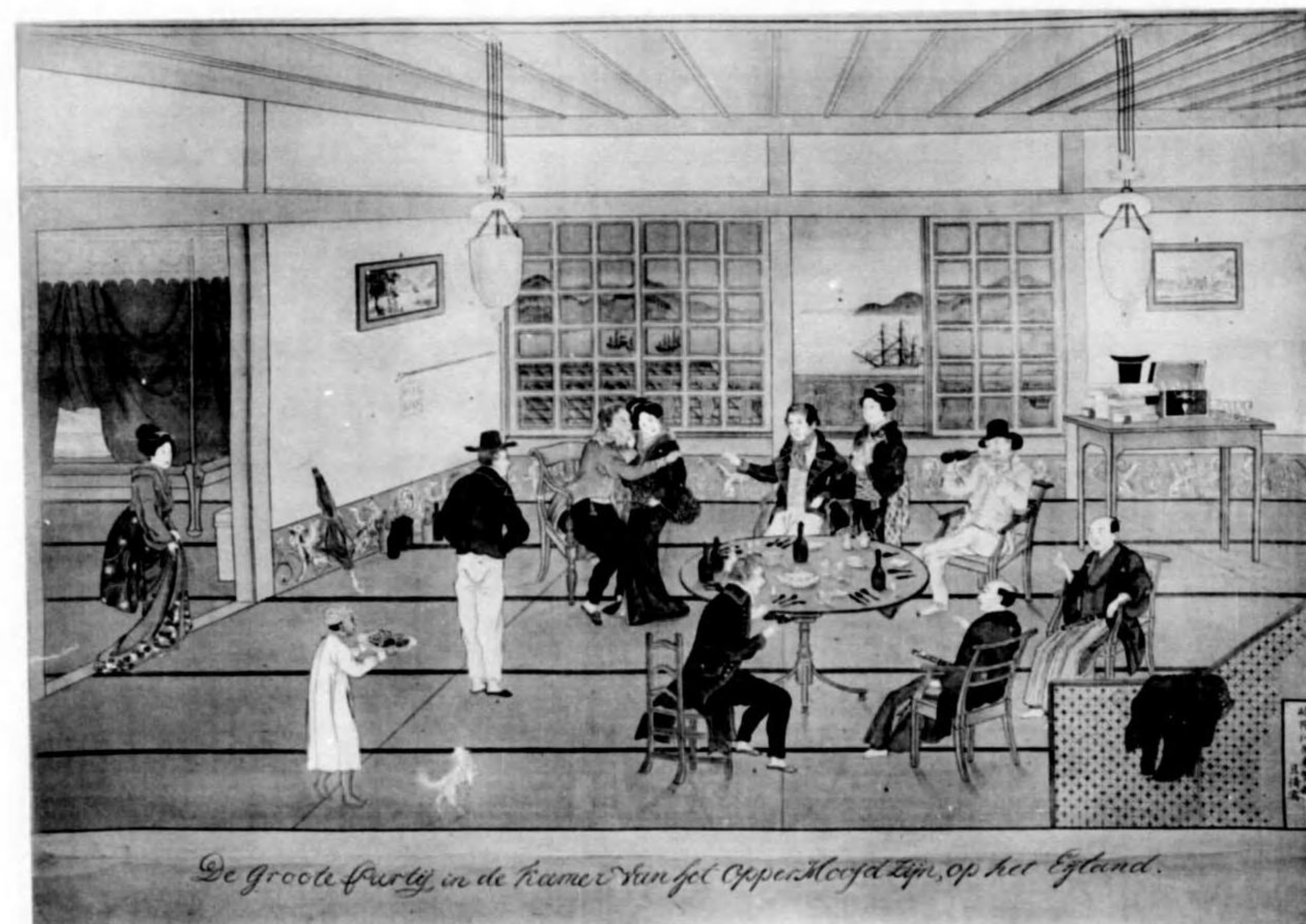
出島の繪圖

出島蘭館内饗宴の圖

本圖の原本は川原慶賀の筆に成り、現に和蘭館に在るそうであるが、茲に掲ぐる所は東京帝國大學史料編纂部中村勝太郎氏の所蔵に係る且壽筆の模本から撮影した。該模本は縦一尺七寸横二尺三寸の幅彩色ものである。

川原慶賀は文政天保頃即ち十九世紀の上半期頃の長崎の書工で、寫生に長じ、シートポルト博士の畫に應じて屢々寫生をしたこともある人であるから、出島には屢々出入し、その内部の様態にも明かであつたことは多言を要せざる所である。

されば本圖は今より百年許前、即シートポルト博士渡來前後の出島甲比丹部屋に於ける饗宴の眞景を寫したものに相違ない。出島門外の制札の第一項に「傾城の外女人入事」とあるから、圖中の婦人も亦その種の人であることは勿論である。



出島蘭館饗宴の圖

長崎港の景

本圖の原本は馬越恭平氏の所蔵に係り、有名な丸山應舉の筆に成る極彩色の密畫で、縦貳尺七寸横參尺壹寸の絹本である。製作の年は寛政四年壬子（一七九二年）であるから、今昭和五年を去る百三十九年前の長崎港の實景である。

圖中扇形の島は出島の和蘭商館である。出島は寛政十年（一七九八年）三月六日の夜火を失し、甲比丹（和蘭商館長を甲比丹と稱した）の住家一棟、蘭人住家十棟、出島役員詰所二棟、土蔵三棟を焼いたので、直に再建築に着手し、同年八月落成した。本圖は出火前の景であるから其後の出島繪畫とは若干相違の點がある。

出島の左に在る長方形の島は新地と稱し、唐船の荷物蔵の所在地である。元祿十一年（一六九六年）の大火で唐船の荷物を貯蔵してあつた倉庫が多く焼失して損害が多かつたので、三十九人の長崎商人が請ふて海を埋め、面積三千五百坪の島を作り、十二棟九百坪の土蔵を建て、唐船荷物の貯蔵所とした。この工事には元祿十二年に着手したのであつたが、同十五年（一七〇二年）三月に至り落成した。之が爲めに要した所の經費は銀四百拾貫目餘で、その内銀二百貫目は幕府から之を貸與した。

新地の左に高い石段坂の見ゆるは大徳寺、その向つて右なる窪地に竹欄を以て囲まれたる一地域内に浮山の建物のある所が唐館である。唐館は支那その他の東洋各國から來る商人の爲めに設けられた居留地であつた。

出島の沖合に楕圓高く三色旗を掲げて碇泊しつゝある船と、港口から多くの曳船に曳かれて入津しつゝある船とは共に和蘭船であるが、唐館前の海中即ち今の梅香崎の邊に碇泊しつゝある數隻の船は唐船である。



長崎港の景

唐館の繪圖

唐館とは唐人即ち支那人を始め暹羅、東京、東埔寨、六見、咬吧等から来る商人の爲めに設けられた居留地であつた。茲に掲ぐる所は長崎市小川水路君所蔵の版圖から撮影したものである。

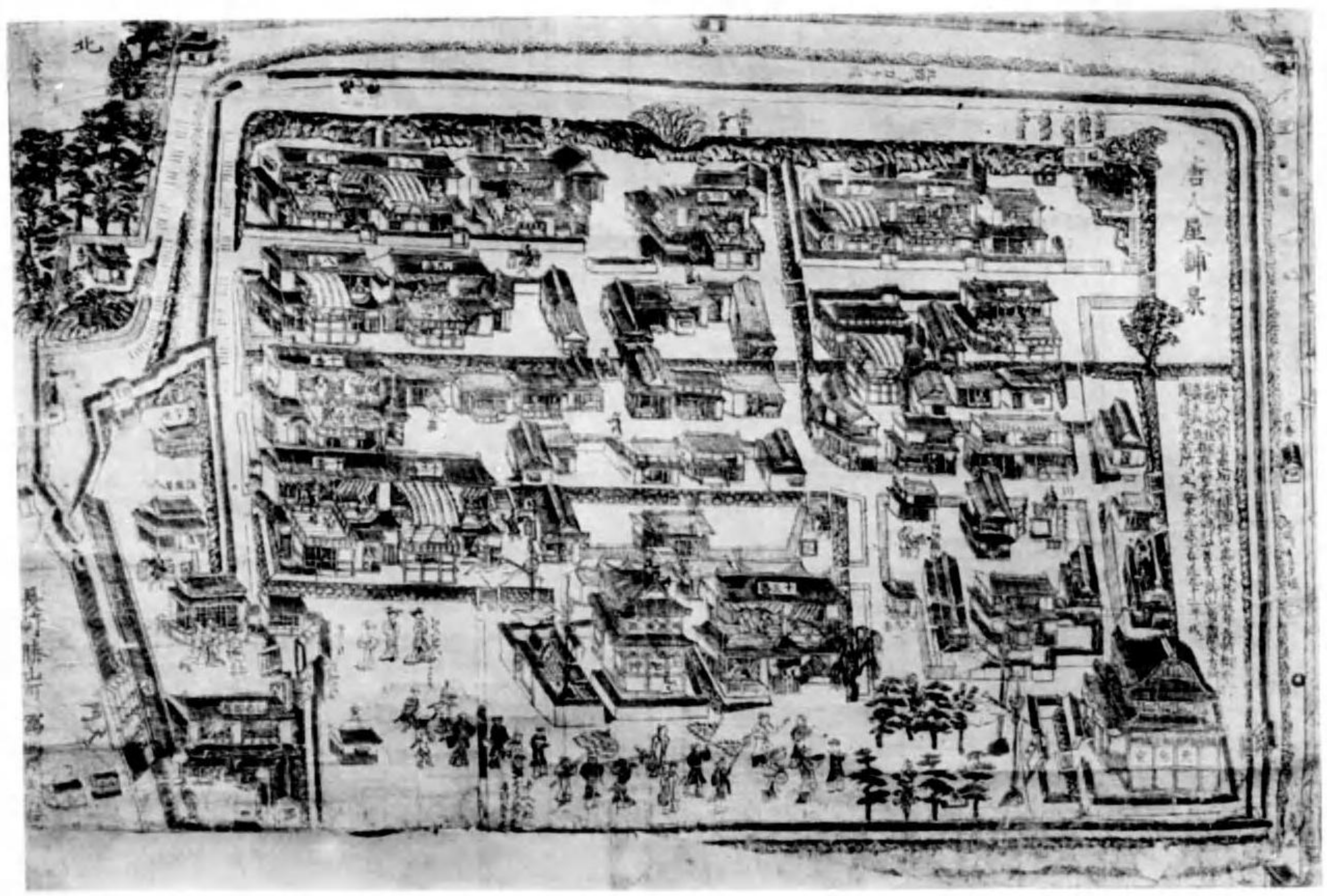
唐人は葡萄牙人が長崎市内散留を禁せられてから後も五十三年の間は自由に市内雜居を許されてあつたが、元禄元年（一六八八年）に至り一定の居留地内に限り居留を許さるゝことになり、同年七月廿四日を長崎郊外十善寺村の樂園に相して工を起し、翌二年四月十五日落成したので、長崎市中に散在せる唐人を悉くこゝに移し、本邦人との交通を遮断することになつた。之が即ち唐館又は唐人屋鋪と稱せらるゝ所である。

唐館の位地は大徳寺の左なる今の館内の地で、その面積は九千三百六十三坪餘、その工事は銀六百三十四貫四百四十匁であつた。其の構造を略述すれば周圍は幅六尺餘の塼壁と竹柵とを以て之を圍ふ、内外二重の門を設け、外門は之を大門と稱し、番人が居て嚴に出入を監視し、役人と船取所有者の外は出入を許さず、内門は之を二之門と稱し番所があつて役人と雖ども室に其の内に出入することを許さなかつた。

大門と二之門との間の面積は六百五十四坪六匁にして、そこには大門番所、新番所、乙名部屋、通事部屋、二之門番所、探番所、土蔵半屋、枿門所などがあつた。

二之門内の面積は六千八百七十四坪にして、そこに唐人の長屋が立並んで居た。唐人長屋は二階造りて、一部屋の面積は三間に九間、又は四間に七間位のものであつた。又百餘軒の商店があつて酒樂雜貨などを賣つてゐた。其の外に土神祠、關帝堂、觀音堂、納涼所溜池、靈魂堂などもあつた。

塼壁と竹柵との間の面積は千八百三十五坪餘にして、そこには五ヶ所の番所を設け、番人が詰切つて居て絶えず館内を監視することになつてゐた。大門外を渡止場又は廣馬場と稱した、今の廣馬場が即ちそれである。



唐館の繪圖

終

